

聴覚障害のある学生への大学間連携によるノートテイク共同実践に関する検討：ノートテイカー学生への聞き取り内容の分類から

下中村, 武
九州大学基幹教育院

岸川, 加奈子
九州大学基幹教育院

横田, 晋務
九州大学基幹教育院

田中, 真理
九州大学基幹教育院

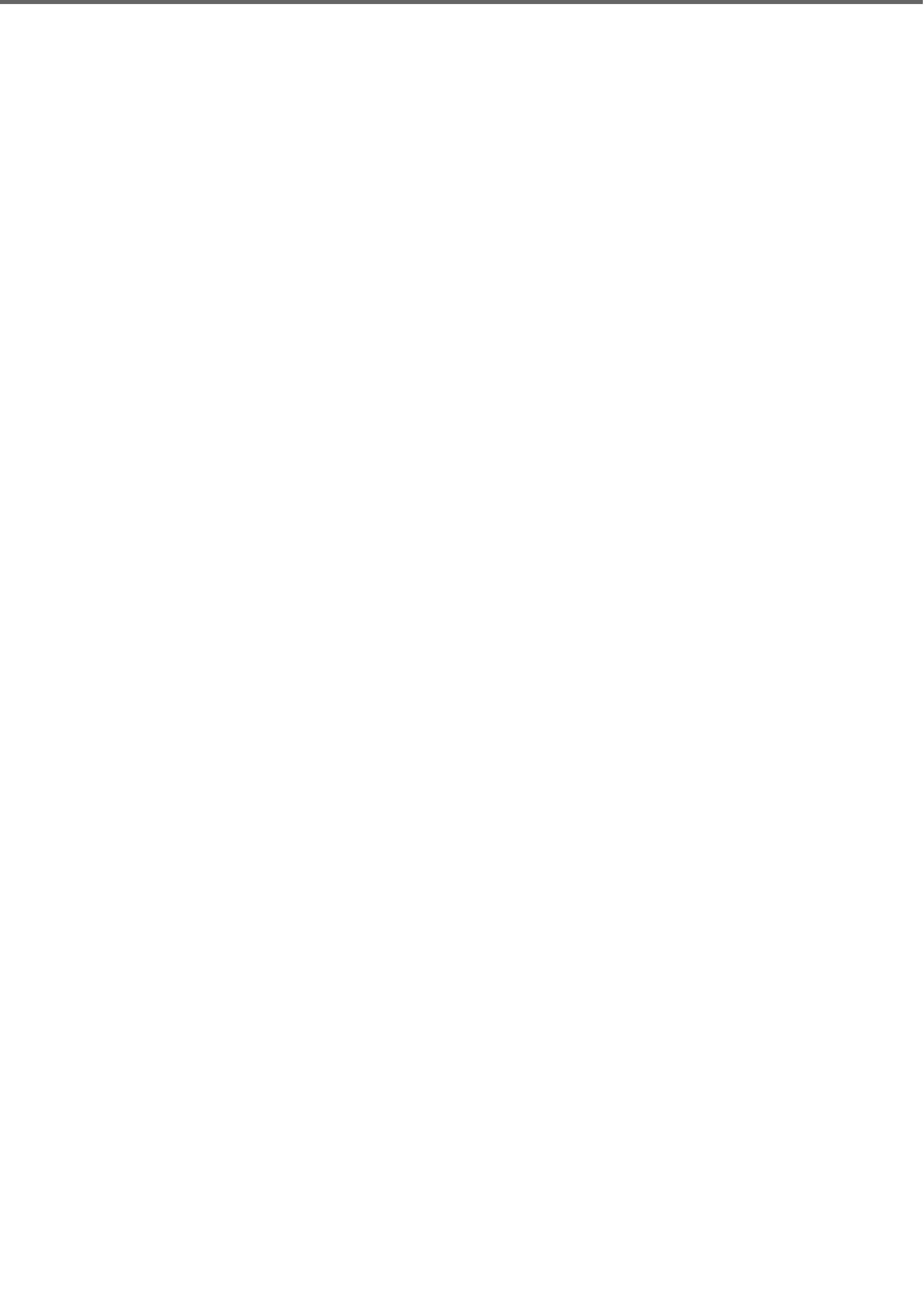
<https://doi.org/10.15017/7169318>

出版情報：基幹教育紀要. 10, pp.25-43, 2024-02-22. Faculty of Arts and Science, Kyushu University

バージョン：

権利関係：© 2022 Faculty of Arts and Science, Kyushu University. All rights reserved. The publisher holds the copyright on all materials published in its journals except special issues, whether in print or electronic form, both as a compilation and as individual articles. All journal content is subject to "fair use" provisions of Japanese or applicable international copyright laws.





聴覚障害のある学生への大学間連携によるノートテイク共同実践に関する検討ーノートテイク学生への聞き取り内容の分類からー

下中村 武^{1,2*}, 岸川 加奈子^{1,2}, 横田 晋務^{1,2,3}, 田中 真理^{1,2,3}

¹九州大学基幹教育院, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

²九州大学キャンパスライフ・健康支援センター インクルージョン支援推進室, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

³九州大学大学院人間環境学府, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

Collaborative real-time captioning practices for students with hearing impairments through inter-university collaboration: From the classification of the content of interviews with students in charge of real-time captioning

Takeshi SHIMONAKAMURA^{1,2*}, Kanako KISHIKAWA^{1,2}, Susumu YOKOTA^{1,2,3},
Mari TANAKA^{1,2,3}

¹Faculty of Arts and Science, Kyushu University, 744, Motoooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

²Support section for inclusion, Center for Health Sciences and Counseling, Kyushu University, 744, Motoooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

³Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, 744, Motoooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

*E-mail: tshimonakamura@artsci.kyushu-u.ac.jp

Received Oct. 31, 2023; Revised Nov. 8, 2023; Accepted Dec. 6, 2023

This study seeks to clarify the effects and challenges of collaborative real-time captioning (RTC) practices through inter-university collaboration and provide recommendations for future collaborative RTC practices. In a roundtable discussion, 11 students in charge of RTC (SicRTC) were interviewed. The analysis of the interviews revealed 224 sections, 76 inter-university collaborative RTC effects, and 148 inter-university collaborative RTC issues. Findings reveal that the effects of inter-university collaborative RTC include “practical learning,” “benefits of increasing the number of people,” “growth of SicRTC,” “feeling that things can be done gradually,” and “suggestions for joint practice.” Meanwhile, inter-university collaboration RTC issues include “securing opportunities for joint practice,” “building relationships between SicRTC,” “prior preparations, confirmations, and meetings,” and “things to keep in mind/manuals when collaborating between universities.” Since opinions regarding inter-university collaborative RTC may vary based on the activity history of SicRTC and their motivation for continuing the activity, continuous sample accumulation of inter-university collaborative RTC joint practices and consideration of effective joint practice are necessary. Moreover, it is now evident that securing opportunities for joint practice is one way to carry out joint practice effectively. Conducting future joint training and clarifying important considerations and issues will be necessary to secure the number of SicRTCs and maintain and improve the quality of information and communication accessibility in assisting students with hearing impairments.

1. 問題と目的

「令和4年度大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書」によると、聴覚障害のある学生（以下、聴覚障害学生）は813校のうち413校に在籍しており（50.8%）、人数は1,833人（ろう学生：435人／23.7%、難聴学生：1,398人／76.3%）であるが、支援を利用している聴覚障害学生は413校のうち341校に在籍しており（82.6%）、人数は1,293人（ろう学生：409人／31.6%、難聴学生：884人／68.4%）である（日本学生支援機構，2023）。聴覚障害学生が在籍する約8割の大学で支援が実施されており、ろう学生については在籍人数の94%（435人のうち409人）が支援を利用しているが、難聴学生については在籍人数の63.2%（1,398人のうち884人）しか支援を利用していない状況である。このような状況の背景として、難聴学生の多くは、通常の学校で学んできたことが多いと想定される。高校においては、聴覚障害のある生徒への支援体制の整備や授業担当教員による配慮実施状況が十分ではないことが挙げられる（下中村・古田，2017；下中村，2018）。また、聴覚障害のある生徒の場合、配慮利用経験が乏しく、聞こえる人と同じように生きることを望み、支援に関するニーズを表明することを意図的に避けることがあるため（根本，2017）、難聴学生の支援利用人数が少ないと考えられる。しかし、聴覚障害の程度に差はあるとしても、聴覚障害学生は、聞こえない、聞こえにくいことにより、授業中に教員や他学生の発言内容を把握することが難しい場合がある。加えて、授業が口頭のみで進行されるという社会的障壁によって、授業への参加が困難になることも考えられる。そのため、このような場合は、聴覚障害学生への合理的配慮として、手書きノートテイク（聴覚障害学生への授業支援を実施している345校のうち112校：28.5%）やパソコンノートテイク（聴覚障害学生への授業支援を実施している345校のうち97校：24.7%）（日本学生支援機構，2023）などが必要となると考えられる。以降では、近年一般的な支援方法となりつつある、パソコンノートテイクに焦点を当てることとする。

音声情報を文字情報として伝える支援方法であるパソコンノートテイクは、聴覚障害学生も含めて、障害のある学生に対する授業支援として実施されている。障害学生へ授業支援を実施している大学637校のうち、パソコンノートテイクを実施している大学数は107校で（16.8%）、視覚障害学生対象が4校（3.7%）、聴覚障害学生対象が94校（87.9%）、肢体不自由学生対象が8校（7.5%）、病弱・虚弱学生対象が3校（2.8%）、重複障害学生対象が8校（7.5%）、発達障害学生対象が10校（9.3%）、精神障害学生対象が3校（2.8%）、その他の障害学生対象が3校（2.8%）となっている（日本学生支援機構，2023）。通常、ノートテイク利用学生は聴覚障害学生であり、支援実践が豊富であるため、本研究も聴覚障害学生への支援に焦点を当てることとする。

聴覚障害学生への支援としてパソコンノートテイクを行うためには、ノートテイクを利用する聴覚障害学生に関する理解や、ノートテイクをするための専用の情報保障システム、入力に関する技術（タイピング、連係入力、整文・要約入力、適切な文字表記での表出）といった専門的な知識・技術が必要となる（下中村・古田，2022）。これらの知識・技術を身につけられるように、ノートテイク学生（以下、NT学生）の養成実践が行われており、養成に参加したNT学生が授業等でのノートテイクを担当している（下中村ら，2021；2022）。また、支援を必要とする聴覚障害学生の在籍

の有無に関わらず、常に支援を提供できる体制を維持することが重要であり、近隣の大学と連携した NT 学生の共同実践や交流機会の設定は、NT 学生の安定確保と技術の維持、NT 学生のモチベーションの維持、NT 学生グループの活性化にもつながる（日本学生支援機構，2015）。また、「障害者活躍推進プラン」の中でも、大学間連携等による障害学生支援体制の強化が挙げられている（文部科学省，2020）。以上から、大学間連携によりノートテイクの共同実践を行うことの意義は大きいと言えるが、大学同士の日常的な連携が必要であることや、NT 学生の受入や協力に係る手続きや負担等が想定されるが、大学間連携によるノートテイクに関する共同実践に関する取り組みが始められつつある。また、ノートテイク共同実践の効果と課題については、各大学・NT 学生の背景（技術レベル、ノートテイク実践の状況、ノートテイクを含む支援の考え方など）によって内容が異なると考えられるため、事例の蓄積が求められていると言える。

大学間連携によるノートテイク共同実践については、複数の事例が見られる。これまでの共同実践の効果として、NT 学生の安定確保や NT 学生の技術の維持、NT 学生のモチベーションの維持、NT 学生グループの活性化（日本学生支援機構，2015）に関する成果が見られるが、これらは大学間連携特有、情報保障一般、遠隔特有に分類することが可能である。すなわち、効果をさらに分類すると、「他大学の支援方法を知ること、自分の大学の支援方法を振り返ることができること」、「大学間の交流により、支援学生の支援に対する意識の向上が望めること」という①大学間連携特有の内容、「より多くの講義で情報保障を行うことができること」という②情報保障一般の内容が示されている。同様に共同実践の課題を分類すると、「事前の複数回の共同練習が必要であること」、「支援ルールの統一が必要であること（空行のみ改行の利用、支援中の現地の動き《板書、読み上げなど》の伝え方、発言者の名前など）」、「大学間で謝金単価が異なっていること」という①大学間連携特有の内容、「事前の準備が必要であること：授業資料、教室の大きさ・着席する場所、支援者・利用者のお互いの自己紹介など」、「相手の状況が分かりづらく不安が大きいこと」、「通常の支援以上の入力技術が必要であること」、「支援終了後に利用者も含めて感想を伝えること」という③遠隔特有の内容が示されている（日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan），2016）。これまでのノートテイク共同実践の事例から、大学間連携特有の内容、情報保障一般の内容、遠隔特有の内容について明らかにされているが、これら以外に大学間連携ノートテイクにどのような効果や課題があるかについてや、受入側と協力側の立場の違いによって、NT 学生の認識がどのように異なるかについては明らかにされていない。大学間連携ノートテイクの効果と課題について明らかにすることは、今後、大学間連携ノートテイクに取り組む大学に対して、ノートテイク共同実践上の留意事項を提示できることに加えて、受入側の大学の NT 学生と協力側の大学の NT 学生それぞれにとってどのような学びがあるかを提示できる点で、大学間連携ノートテイクの効果と課題を明らかにすることには意義がある。そのため、ノートテイク共同実践を担当した NT 学生に対して聞き取りを行い、得られた聞き取り内容を整理することで、共同実践の効果と課題について具体的に明らかにすることができると考えられる。

以上から、各大学の NT 学生の不足や維持の難しさという課題に対して、それを補う方法として大学間連携によるノートテイク共同実践が考えられた。しかし、ノートテイク共同実践の効果と課題については、事例的に明らかにされている部分もあるが、大学間連携ノートテイクの効果と課題

は十分に明らかにされておらず、その内容は受入側と協力側の大学という立場によって認識が異なる可能性がある。そのため、本稿では、大学間連携によるノートテイク共同実践の効果と課題について明らかにし、今後のノートテイク共同実践に向けた示唆を得ることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査対象

X年度後期、(X+1)年度前期に、派遣先(受入側)A大学の学生8名と派遣元(協力側)B大学の学生3名、合計11名を調査対象とした。NT学生の属性を表1に示す。

表1 NT学生の属性

| 大学 | 学生 | 担当 | 学年 | 活動歴 | 支援歴 |
|------|----|----------------------|----------|-----------------------|----------------|
| A 大学 | 01 | X年度2科目 | 4年 | 3年半程度 | 3年程度 |
| | 02 | X年度1科目 | 3年 | 2年半程度 | 2年程度 |
| | 03 | X年度1科目 | 2年 | 1年半程度 | 1年程度 |
| | 04 | X年度1科目 | 2年 | 1年程度 | 半年程度 |
| | 05 | (X+1)年度1科目 | 4年 | 3年半程度 | 3年程度 |
| | 06 | (X+1)年度1科目 | 4年 | 3か月程度 | なし |
| | 07 | (X+1)年度1科目 | 3年 | 3か月程度 | なし |
| | 08 | (X+1)年度1科目 | 2年 | 3か月程度 | なし |
| B 大学 | 09 | X年度2科目 | 3年 | 2か月程度 | なし |
| | 10 | X年度1科目 | 3年 | 1年8か月程度 | あり：詳細不明 |
| | 11 | X年度1科目 (X+1)年度2科目 | 3年 4年 | 2か月程度 2か月程度以上：詳細不明 | なし あり：大学間連携 |

2.2. 手続き

共同実践の流れとしては、①第1著者と第2著者によるノートテイクの留意点に関する説明会(オンラインで1時間程度)、②ノートテイク共同実践(1時間30分)(captiOnlineまたはUDトークを使用/授業は1年生対象の基幹教育科目(講義)と3年生対象の専攻教育科目(講義、ゼミ))、③授業直後の共同実践振り返り(オンラインで15分程度)、④第1著者と第2著者による共同実践の全体振り返り(座談会形式/オンラインで1時間程度)、であった。共同実践の全体振り返りの際にNT学生に質問した内容は、①大学間連携によるノートテイクについての感想や意義、②大学間連携ノートテイクの課題、③大学間連携ノートテイクに関する今後の要望などであった。このときに得られた聞き取り内容を分析対象とした。なお、全体振り返りについては、一度に全員が集まることが難しかったため、X年度後期分については3回に分け、(X+1)年度前期分については2回に分けて実施した。また、第1著者、第2著者がNT学生からの意見を聞き取った。

ノートテイク共同実践にあたり、派遣先 A 大学が NT 学生のコーディネーターとして、B 大学への連絡、B 大学 NT 学生への連絡等（説明会の実施、ノートテイク実施に関する連絡、授業担当教員への連絡、支援に関する連絡のためのチャットツールの作成、授業資料を受け取るための Moodle に関する連絡・設定、大学間連携ノートテイク終了後の振り返り等）を行った。派遣元 B 大学は所属大学の学生に共同実践について案内を行うという役割を担った。

2.3. 調査時期

X 年 12 月（1 回）、(X+1) 年 1 月（1 回）、2 月（1 回）、8 月（2 回）に実施した。

2.4. 分析方法

NT 学生から得られた聞き取り内容について、①意味のまとまりごとに切片化する、②切片を「大学間連携ノートテイクの効果」または「大学間連携ノートテイクの課題」に分類し、その中で「大学間連携特有の内容」、「情報保障一般の内容」、「遠隔特有の内容」のいずれかに分類する、③切片を類似した内容で分類し、項目名をつける、という作業を行い、整理した。

2.5. 倫理的配慮

データ使用目的やデータの取り扱いに関するプライバシー保護、自由意思での参加について説明し、結果を公表することについて、口頭および書面で同意を得た。

3. 結果

NT 学生から得られた聞き取り内容を分析した結果、切片数 224、大学間連携ノートテイクの効果 76 件（大学間連携特有の内容 55 件／9 項目、情報保障一般の内容 19 件／7 項目、遠隔特有の内容 2 件／2 項目）、大学間連携ノートテイクの課題 148 件（大学間連携特有の内容 66 件／12 項目、情報保障一般の内容 71 件／17 項目、遠隔特有の内容 11 件／3 項目）であった。

大学間連携ノートテイクの効果のうち、大学間連携特有の内容を表 2 に、情報保障一般の内容を表 3 に、遠隔特有の内容を表 4 に示す。大学間連携特有の内容としては、「1. 実践的学び」（12 件、B のみ）、「2. 人数が増えたことのメリット」（10 件、A のみ）、「3. テイカーの成長」（9 件、A のみ）、「4. 徐々にできる感覚」（6 件、共通）、「5. 共同実践に関する提案」（6 件、共通）、「6. テイカー同士の関係構築」（4 件、共通）、「7. 安心感」（4 件、B のみ）、「8. 大学間連携の継続」（3 件、共通）、「9. 普段と変わらない支援」（1 件、A のみ）が挙げられた。

大学間連携ノートテイクの課題のうち、大学間連携特有の内容を表 5 に、情報保障一般の内容を表 6 に、遠隔特有の内容を表 7 に示す。大学間連携特有の内容としては、「1. 共同練習の機会の確保」（18 件、共通）、「2. テイカー同士の関係構築」（9 件、共通）、「3. 事前準備・確認・打ち合わせ」（9 件、共通）、「4. 大学間連携時の留意事項・マニュアル・引き継ぎ」（7 件、共通）、「5. ペアとの関係入力」（5 件、A のみ）、「6. 他大学の状況把握」（5 件、A のみ）、「7. 文字表記の統一」（5 件、A のみ）、「8. 訂正の方法」（3 件、A のみ）、「9. 入力・訂正以外の役割」（2 件、B のみ）、「10. 振り返り方法の改善」（1 件、A のみ）、「11. 普段と変わらない支援」（1 件、A のみ）、「12. 大学間

連携と通常のノートテイクの比較の難しさ」(1件、Bのみ)が挙げられた。

表2 大学間連携ノートテイクの効果：大学間連携特有の内容

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|-------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 実践的学び (12件、Bのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・今回の大学間連携の取り組みで、身近でない人のノートテイクを見れたので、学びがあった。 ・授業が終わった直後の振り返りがあることによって、ノートテイク担当の不安がなくなっていたので、A大で初めてノートテイクができてよかった。 ・ノートテイクの実践機会がないB大学の学生にとってはノートテイクの習熟にもつながる。 |
| 2. 人数が増えたことのメリット (10件、Aのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・人数が増えて、ありがたかったという気持ち大きい。UDトークも、captiOnlineも、2人は大変。常に入力している状態なので、入力もしないといけないし、誤字も訂正しないといけないので、タイムラグが生じる。訂正している間に情報が抜け落ちてしまうことがあるので、入力している人とは別に、訂正のために待機している人がいるのは大きかった。 ・captiOnlineなどにあまり慣れていない中で参加してもらい、大変だったかもしれないが、原稿パネルなどの使い方をすぐマスターしていたので、助かりました。 |
| 3. テイカーの成長 (9件、Aのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・最初は、操作や聞き取って覚えて入力するなどについて、不安定なところもあったが、B大のテイカーは分からないところはしっかり聞いてくれるし、適応力もある人だった。最終的には問題なく、ストレスフリーでできた。 ・話を振ったときに自分が気づかなかったところにも意見をたくさん出してくださったり、積極的に発言してくれたりした。振り返りもスムーズに進められたので、皆さんの積極性や、気づける力に助けられた。 |
| 4. 徐々にできる感覚 (6件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・直接支援に入った経験が初めてだったこともあり、始まる前はきちんと連携できるかと不安も多かったが、結果的にスムーズに連携できた。反省点や技術を向上させていけないといけない点もあるが、ノートテイク全体としてはスムーズにできた。(A) ・技術が上がっていったことを感じられた。最初は分からないこともあったが、だんだんと手順が分かってきたので、回数を重ねるのは大事なことだと思う。(B) |
| 5. 共同実践に関する提案 (6件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・他大学にもノートテイクを頑張っている人がいると知ることができたので、一緒に頑張ろうという気持ちになった。機会があれば、一緒にノートテイクしたい。(A) ・積極的に大学間連携のノートテイクの機会を設定してもらえると、参加したい気持ち大きい。(B) |

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|---------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 6. テイカー同士の関係構築 (4件、共通) | <p>・振り返りをしているとき、顔出しすればよかった。そうしたら、もうちょっと話しやすかったと思う。またノートテイクの機会があれば、お願いしたい。</p> <p>(A)</p> <p>・何回か支援経験を重ねていくうちに、一緒にテイクをしてくれる皆さんが優しい人ばかりで、緊張感もほぐれた。支援が終わった後の振り返りでも、言いたいことも言える。テイク中も困ったときにサポートしてくださるので、疎外感はなく、チームに入れていただいた。助けていただきながら支援できたことがよかった。(B)</p> |
| 7. 安心感 (4件、Bのみ) | <p>・A大とは初めてだが、***さんはサークルで顔見知りなので、安心できる要素だった。</p> <p>・思ったよりは緊張せず、安心感があった。***先生から「A大の2人がすごい」と聞いていたので、2人がいてくれるだけで安心できた。</p> |
| 8. 大学間連携の継続 (3件、共通) | <p>・支援ができて、貴重な経験になったので、ありがたい。B大学にはお世話になった。今年卒業するので、A大からはいなくなるが、ほかのテイカーにはぜひ今後もこういう取り組みを続けてもらいたい。大学間連携ノートテイクをやっていることを知る機会があるか分からないが、応援している。(A)</p> <p>・UDトークを使う機会があり、幅広い知識を得られたと思うので、満足している。4年生になるが、気持ちに余裕があったら、また参加させてほしい。(B)</p> |
| 9. 普段と変わらない支援 (1件、Aのみ) | <p>・4月から支援に入ったので、区別して考えるのが難しいところがあるが、大学間連携という面ではスムーズで、大学をまたいでいる感じはあまり感じられなかった。A大の中での支援とあまり変わらない感じでした。自分が迷惑をかけているだけかもしれない。手応えとしては、A大内だけでの支援と変わらない形でできてよかった。</p> |

表3 大学間連携ノートテイクの効果：情報保障一般の内容

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. テイカーの成長 (4件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・タイピングが速いと思っていた。回を重ねるうちに、連係のリズムもつかめてきた感じはあった。(A) ・難しい単語も出てくるが、それも結構文章になって漢字になって出てきたので、しっかり変換ができていた。(B) |
| 2. 情報保障への参加の意義 (4件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・captiOnlineなどの研修は受けていたが、UDトークの操作方法については、B大のテイカーと同じくらいの知識・経験だった。自分もできなかったことがあり、一緒にこうすればよかったねと気づいて、一緒に成長した気がするので、レベルの差みたいなものは感じなかった。(A) ・複数回参加した。手順や方法、何でその手順を取るのかということも推測することができ、自分の中でパソコンノートテイクの基盤ができた。(B) |
| 3. 振り返り機会の有効性 (4件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りのときに、どうなっていますかと聞いてくれたので、自分たちはこういうふうに決めていたがどうか、という話ができた。回を重ねるごとに統一できていないところが減ってきたので、振り返りの機会があって、よかった。(A) ・振り返りがあったのがよかった。振り返りがあることで、その人の人柄、次に何をすればいいのか、今回やった中で何がだめで、次にどこを改善していけばいいかを文字にできていたので、そこがよかった。(B) |
| 4. ノートテイクと授業内容の関連 (2件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・今まで学習したことと学びがつながるのは面白いが、数字の扱いが怖く、入力しにくい印象だった。UDトークだったので、ギリシャ文字で知らない記号が出てきた。単語登録では、読みと文字を登録しないといけないので、調べたら複数の読み方があるときの絶望感があった。一応登録しておいて、授業前にその場面を出して修正するようにした。そういう難しさはあった。 ・プログラミングで統計をしているので、そういう意味では、ノートテイクと関連性があった。これはもう1つのほうだが、出てくる単語が専門的だが、知っているということとはたびたびあった。(B) |
| 5. テイカー同士の関係構築 (2件、Aのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・言いたいことが言えないみたいなことはなく、仲良く進められたと思う。やわらかい雰囲気作りはみんなで作っていったというものもあるが、リーダーの腕が見られた。 |
| 6. 人数が増えたことのメリット (2件、Aのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・人数が増えたということで、一気に楽になった。最後まで、3人でも何とか回せるが、集中が途切れる。4人だと修正が2人もいるので、ちょっと心の余裕を持ちながら集中して支援ができた。 |
| 7. 使用システムの使いやすさ (1件、Bのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・UDトークを使うのに抵抗はなかった。初めて使ったが、操作は難しくはなかったもので、修正しやすかった。操作もしやすく、困るところはなかった。 |

表 4 大学間連携ノートテイクの効果：遠隔特有の内容

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|---------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 徐々にできる感覚 (1件、Bのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・テイク実施後の振り返りシートの確認や ZOOM での振り返りがあったので、不安はなくなった。ペアが何を考えているのかがオンラインだと分からないので、その振り返りで声が聞けるだけでも、気持ち的につながりができたのがよかった。テイクを続けていくにつれて、徐々に適応している感覚があり、楽しかった。 |
| 2. 遠隔地のテイカーと担当教員の関係 (1件、Bのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・授業の前々日に授業資料を送ってくれた。資料を受け取りましたなどの簡単なやり取りをした。授業の最初と最後に、音声ちゃんと聞こえますかとか、授業終わりに、ありがとうございましたとかのコミュニケーションは取れた。オンラインだが、取り残されている感じはなかった。自分がオンラインで参加していることを気にかけてくれていたので、やりやすかった。 |

表5 大学間連携ノートテイクの課題：大学間連携特有の内容

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|----------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 共同練習の機会 の確保 (18件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・一緒に練習をしたことがないので、連携がうまくいかないとか、全部打っていると時間がないから要約するというときにも、チグハグになって、文末がおかしいこともあった。一緒に練習したい。(A) ・ノートテイク本来の課題か、大学間連携の課題か難しいが、一番思ったのは事前練習がなかったので、知識をあらかじめ共有できていない、能力を共有できていないので、練習はあったほうがいい。(B) |
| 2. テイカー同士の 関係構築 (9件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの機会はあったほうがいい。事前の打ち合わせで顔合わせはあったのは、お互いの顔、話す感じは少し分かって支援に入れたのでよかった。地理的な距離の問題さえクリアできれば、対面で会うのもいい。やるなら、授業始まってからではなくて、テストが落ち着いた時期だとなお嬉しい。(A) ・B 大から長期間やったのは自分だけ。相談できる身近なサークルメンバーがいないのは心細くはあった。同じ大学の人がもう少しいれば、守秘義務はあるにしても、身近に話せて、実力の上がり方も違うと思った。(B) |
| 3. 事前準備・確認・ 打ち合わせ (9件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・captiOnline の機能を授業に入る前に話してもらったと思うが、原稿パネルは説明していなかった気がする。水曜日の英語の授業では、先生が同じようなことを英語で話すので、テイカー側で原稿を作っていたが、それを私たちは何も***さんに共有せずに使っていたが、そういえば説明していなかったもので、説明をすることにした。A 大内では当たり前になっていることも、他大学と一緒にやるときは見直して、丁寧にすり合わせていく必要がある。(A) ・回数を重ねるごとに振り返りがあったので、だんだんと連携も取れたと思う。事前に顔合わせみたいなことはあったが、こうしようみたいな打ち合わせができると、早い段階からよかったかもしれない。(B) |
| 4. 大学間連携時の 留意事項・マニユ アル・引き継ぎ (7件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・知っておくべきことのチェックリストがあるといいかもしれない。(A) ・今後、定期的にいろいろな大学から手伝ってくれる人が入ってくれるなら、大学間連携用のマニュアルも作ったら、意識の統一が簡単になるのではないか。(A) ・雇用手続きをしないといけないのは分かっているが、やり取りをたくさんしないといけない。それ以外に Moodle 手続き、Outlook など、手続きを一気にしないといけない。支援のためには重要だが、大変だと感じた。それをなくすのはできないと思うが、1 つ思ったのは、何か所かの人とメールのやり取りをしたが、そこが可能なら、一本化できれば、こちらとしても確認がしやすい。(B) |

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|----------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 5. ペアとの連携入り力 (5件、Aのみ) | <p>・ペアの組み方に関連して、もしA大ペアとB大ペアがチームになってテイクする場合、A大のペアは組み慣れている2人、B大でペアは組み慣れている2人を一緒にテイクすると、ペアの組み方を固定して、交代交代やるとなると、支援に入る前に事前に連携する練習をする時間が取れなくても対応できると思った。ペアの組み方も工夫の余地があると思った。(A)</p> <p>・その場限りの連携はちょっとずつできるが、根本のズレみたいなものは授業に入るか、練習するかはしないと、時間は結構かかる。</p> |
| 6. 他大学の状況把握 (5件、Aのみ) | <p>・他大学から支援に入ってくれる人がどれくらいノートテイクをしているのか、他大学の研修ではどういったことを学んでいるのか、表記の統一などを、事前打ち合わせなどでテイク同士で内容を共有してすり合わせることができればいい。相手がどういうことを知っているのか、こういうことは確認できているなど全員認識できるので、よりスムーズに連携に入ることができる。</p> |
| 7. 文字表記の統一 (5件、Aのみ) | <p>・一緒に組む分には問題がないが、「話者／」をこちらがサポートしたりがあれば、全然問題なく進むようなレベル。一緒に入るには問題がないが、引っ張っていく立場ではない。初学者と同じくらい。3人体制なら何とかできるレベル。</p> <p>・例えば、ろう学校の表記はろう？聾？A大で練習をしている中では、ひらがなで統一しましょうと共通認識を持っていた。B大でも、表記の統一ルールがあったかと思った。ズレがあったのかなと思った。</p> |
| 8. 訂正の方法 (3件、Aのみ) | <p>・訂正を全投げしても、情報のどこが必要かどうかの選択の基準があまり養われていない。</p> <p>・訂正してほしいところに訂正が入らないことがあった。自分が入力担当のときに念を送っても届かない場面があった。</p> |
| 9. 入力・訂正以外の役割 (2件、Bのみ) | <p>・どこまでどうしたらいいかが分からない。1回***さんが抜けた(訂正パネルの調子が悪くて)。タイマーが止まっていた。あれって止めてなかったですよ？私がシステムを知らなかったこともある。いなくなってタイマーが止まったけど、操作はしていない。captiOnlineを知らないから、誰かが止めるとかルールがあるかと思って。誰か1人いない中でタイマーが進んでいる中で、どうしたらいいかとか思った。</p> |
| 10. 振り返り方法の改善 (1件、Aのみ) | <p>・画面オフで振り返りをやっていた。***さんの的には怖かったかも。やりづらかったのかも。</p> |
| 11. 普段と変わらない支援 (1件、Aのみ) | <p>・大学が違うからと言って、UDトークでの修正に課題はなかった。どこをどうしたら何が動くかという認識の違いはあったが、大学の違いはなかった。</p> |

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|----------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 12. 大学間連携と通常のノートテイクの比較の難しさ (1件、Bのみ) | ・B大でノートテイクをしたことがなかったので、形式の違い、作法、技術面など、今回やったのがお手本という感じだった。いつもしているものがないので、どこが課題か比べにくい。 |

表6 大学間連携ノートテイクの課題：情報保障一般の内容

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 事前準備・確認・打ち合わせ (18件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・事前にテイカーだけの打ち合わせとか、振り返りの引き継ぎがあるとスムーズになると思う。(A) ・話し合いみたいな機会を作ったほうがよかったなと思いました。授業、先生の情報は、行ってみて初めて知ること多いので、授業が始まってから先生はこんなに話すスピードが速いんだと思うこともあって、そこの不安感をどうやったら解消できるのか。基本は入力担当だが、修正も含めてのテイクなので、厳しいと思ったらヘルプに入れることも伝えて、緊張をほぐすのが大事だと思った。事前打ち合わせの時間でそういうことができればいい。(A) ・接続先の共有については、自分からも事前に確認しておくとうよかった。もっと早く対応できればよかったので、反省点として大きい。(B) |
| 2. ノートテイク技術 (9件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・全文や整文は足りない印象。(A) ・1人でもできるタイピング練習もあるし、関係入力はサークルの機会でも鍛錬を積んでいきたい。(B) ・今回ノートテイクを担当したが、力不足。A大生にフォローしてもらったのがある。(B) ・パソコンノートテイクの技術面では、ペアと比べると技術不足と感じていたが、ペアに助けてもらうことが多くあった。自分自身がどこで貢献できているか不安なことがあった。(B) |
| 3. 文字表記の統一 (9件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・相手が打って表出するのを待たずに出してしまうことで、文章が前後することがあった。(A) ・数字は基本的に半角で出る。フォント的にも半角のほうが見やすいところもあった。そこは最初は全角に直していたが、途中から見やすさを考えると、最初のほうが見やすいと思った。一つ目、など漢数字で出ていた。(A) ・テイカー同士の表記の統一をする余裕がなかった。複数人いるので、誰に合わせるべきかも分からないとなった。そこも難しい。(B) ・B大サークルとして、文字表記の統一ルールを決めていくのも、活動の1つとしてありかも。(B) |

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|----------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>4. 特定の授業への対応 (5件、共通)</p> | <p>・数式の単語登録は、発表スライド、授業資料を見て、出そうだなというのは、登録していた。(1+c)とか、文字に数式がついているとか、右肩に数字がついているものを登録した。小さい文字で出せるわけではないので、kに小さい(1+c)があるとしたら、(1+c)を登録して、これが肩に載っているのを説明した。他には、^を使ったりしていた。分数表記で内容が長いときは登録しておいて、きれいに読まれたら、分母か分子を入れ替えるようにしていた。微積の表記も迷ったが、微分が多かった。(A)</p> <p>・リスニング能力に自信がない。聞き取り段階で難しい。担当の恐れはとてもあった。聞き取れるところは頑張って入力して、原稿を事前に作れるところは作って、先生の話で定型的な話なら、言い回しをショートカットキーで出せるようにして、という聞き取って入力する以外の準備を頑張ってカバーした。英語に強いテイカーが来てくださったら、ネイティブのテイカーがいたらいい。(B)</p> |
| <p>5. ペアとの連携入力 (5件、Bのみ)</p> | <p>・関係の感覚に慣れるには2コマかかるかも。</p> <p>・関係の感覚をつかむまでにどれくらいかと言われて、数字、回数は分からないが、1回でも違うと思う。</p> |
| <p>6. タイピング速度 (4件、共通)</p> | <p>・2人のタイピング速度が授業についていくのに十分なレベルならそれでもいいが、足りないなら、いくら技術があっても授業にはついていけない。(A)</p> <p>・そもそもの話として、タイピングが速くない。ミスタイプもかなり多い。聞いて入力するのも時間がかかってしまう。ああだこうだしているうちに、情報が抜け落ちてしまうことがあった。(B)</p> |
| <p>7. 入力・訂正以外の役割 (3件、共通)</p> | <p>・単語登録は私が担当したが、初回から他大学学生が入るなら、それを分担するのか、誰かがするかは気になった。単語登録しながら、単語の意味とか、文脈を考えられるので、やりたいくらい。ちゃんと勉強できるし、ありがたいと思うが、分担や誰がするかは問題点として出てくる。(A)</p> <p>・B大は練習できていないが、仮にB大で技術的にもできたと仮定すると、こうなったらこうサポートするとか、こういうときはこうしていこうという流れ、チームの中でのシステムができると思うが、初めましてというのがあると、していいのかなとか、失敗したらどうしようというのがある。(B)</p> |
| <p>8. 訂正の方法 (3件、共通)</p> | <p>・訂正も慣れが必要だと思う。(A)</p> <p>・自分が入力していないときに訂正があるが、***のところのフォローができなかった。(B)</p> |
| <p>9. 日常的な連絡手段 (3件、共通)</p> | <p>・LINE WORKS で利用学生が入っていないグループでも、資料とかが混ざって必要な情報が分からなくなる。(A)</p> <p>・密に連絡を取れたりというのがあるといいのかもしれない。(B)</p> |

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|----------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 10. 緊張や焦り (3件、Bのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・ずっとパニックでした。始まる前は、寒かったということもあり、手を温める意味でもタイピングをやっていた。 ・もうすぐ始まると思うと、ドキドキしていた。始まってからもどうしようかになって。 |
| 11. テイカーの負担軽減 (2件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・初めてUDトーク修正をする人なら、プラスで1人いてもいいと思った。初めてノートテイクする人も、3人目みたいな感じで入ってもらうなら、やりやすくなると思う。慣れてきたら2人でも足りると思う。(A) ・2コマ続けてだったが、そんなに長時間タイピングすることはない。集中していたと思うが、手が疲れてきて、感覚がおかしくなった。左手が言うことを聞かなくなった。もう少し力をつけたい。(B) |
| 12. UD トークの使い方 (2件、Aのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・動作がうまくいかないとき、ちゃんと開いているのに、文字が英語の文字から変換できないこと、急に入力できないことがあったので、原因がよく分からなかった。 |
| 13. テイカー同士の関係構築 (1件、Aのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・対面で会う機会はあったほうがいい。同じノートテイク班でも、私自身が前期にノートテイクを始めたときに声しか知らない人もいた。去年後期から練習に入ったのと、前期の定例会に入ったのと、去年が完全オンラインということもあり、声しか知らないとか、振り返りのときも話しぶらいことがあったので、B大の***さんもそういう気持ちかなと思った。1回会うと、オンラインになっても話せるし、話す抵抗がなくなると思うので、そういう面では1回会って話すといい。 |
| 14. ノートテイクシステムのマニュアル (1件、Aのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・captiOnlineの使い方のマニュアルとか、過去に作っているものがあって使えそうなら共有してもいい。 |
| 15. ノートテイク担当の時期 (1件、Aのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・初回から授業の雰囲気をつかむのがよかったのではないかな。本来は冬学期最初のはずが、秋学期の最終を最初に担当することになった。 |
| 16. 活動の心構え (1件、Bのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・タイピングが速ければよかったかもしれない。今回実践が初めてだったので、ある程度自分のフィールドで1回体験しておく、心持ちが違ったと思う。それがあれば、自分のやり方の芯ができるが、それがなかったので、やっていくうちに芯を作っていく感じになった。自分の大学や他の大学で芯を作っているとよかった。 |
| 17. 振り返り方法の改善 (1件、Bのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りで、カメラオフのときは、3対1なので、どなたが話しているかも分からないので、カメラオンがいいこともいいと思うが、教室の状況もあると思うので、しょうがないと思っている。 |

表7 大学間連携ノートテイクの課題：遠隔特有の内容

| 項目 | 代表的な具体的内容 |
|--------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 遠隔の難しさ (6件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミの授業だったので、学生の様子として質問や回答で話者が変わることもあったので、学生の様子と、スライドを使って説明している様子が分かるという。ZOOMのポインター機能を使うと、どこを説明しているかは分かりやすい。板書は、学生がいる方向とは別の黒板に書いている形だったので、別のパソコンを用意すると、見えないこともないと思う。教室の様子が見えるようにしてもらったのが最後の回だった。今後について話せなかったので、パソコンの台数を増やすのも手だと思う。(A) ・遠隔だからこそその現地の様子が分からず修正できなかつたとき、UDトークの修正がうまくいかないことが課題だった。(B) |
| 2. ノートテイクシステムの使い方 (4件、共通) | <ul style="list-style-type: none"> ・資料を先生が画面共有してくれている場合は、資料は開いておくが、ZOOMを画面に5分の2にしていた。Fキーが途中で切れて見れないこともあったので、captiOnlineを見れるように開いていた。画面共有されていない先生だと、ZOOMの上から資料を置いてしまって、またcaptiOnlineのスペースを広めにとるとか、ZOOMか資料のどちらかを取っていた。もう少しいいやり方もあったかもしれないが、資料、ZOOMのどちらかを置いていると共有している画面が小さくて見れないので、すぐに情報をキャッチできるほうを優先していた。(A) ・ミーティングのときに言ったが、使ったことがあるのはIPtalkのみで、captiOnlineを使ったことがなかった。基本は同じだが、最初は戸惑いがあった。(B) |
| 3. 遠隔地のテイクと利用学生の関係 (1件、Bのみ) | <ul style="list-style-type: none"> ・こういうふうにしてほしいということを聞く場があれば、支援の質向上にはつなげられると思う。途中で、こういうことをもっとこうしてほしいと聞く場があるといいかもしれない。当事者との交流の場があれば、今後の支援のモチベーション、気を付けるべきところにつながると思う。実際に話をしたり、話を聞くことで、どういうことに気を付けるべきかとか、メンバーとしての方向性として、こういうことをしていこうとつながるかもしれないので、そういうことがあるといい。 |

4. 考察

4.1. 大学間連携ノートテイクの効果

大学間連携特有の内容(表2)から、「実践的学び」、「共同実践に関する提案」などが明らかになった。PEPNet-Japan(2016)では、「他大学の支援方法を知ることで、自分の大学の支援方法を振り返ることができること」、「大学間の交流により、支援学生の支援に対する意識の向上が望めること」

という内容が指摘されていた。「今回の大学間連携の取り組みで、身近でない人のノートテイクを見れたので、学びがあった。」(表2:1. 実践的学び)、や、「他大学にもノートテイクを頑張っている人がいると知ることができたので、一緒に頑張ろうという気持ちになった。機会があれば、一緒にノートテイクをしたい。」(表2:5. 共同実践に関する提案)という内容から、本研究は先行知見と同様の結果であった。今回の大学間連携ノートテイク実践では、受入側 A 大学の NT 学生はノートテイク活動歴が短い学生から長い学生までが担当していた一方で、協力側 B 大学の NT 学生は、ノートテイクの練習経験はあるものの、ノートテイク実践の経験が乏しい学生がほとんどであったため、B 大学のみで「1. 実践的学び」が見られたと考えられる。

一方で、これまでに明らかになっていなかった内容として、「3. テイカーの成長」が挙げられる。これらは受入側 A 大学のみで見られた意見であり、協力側 B 大学の NT 学生が担当することによる支援の負担軽減や、A 大学から B 大学にノートテイク実践を通じてノウハウを教えることにより、B 大学の NT 学生が成長したと考えられる。具体的には、「最初は、操作や聞き取って覚えて入力するなどについて、不安定なところもあったが、B 大のテイカーは分からないところはしっかり聞いてくれるし、適応力もある人だった。最終的には問題なく、ストレスフリーでできた。」という意見が見られた。

4.2. 大学間連携ノートテイクの課題

大学間連携特有の内容(表5)から、「1. 共同練習の機会の確保」、「2. テイカー同士の関係構築」、「3. 事前準備・確認・打ち合わせ」、「4. 大学間連携時の留意事項・マニュアル・引き継ぎ」などの改善点に関する意見が見られた。PEPNet-Japan (2016) では、「事前の複数回の共同練習が必要であること」、「支援ルールの統一が必要であること(空行のみ改行の利用、支援中の現地の動き《板書、読み上げなど》の伝え方、発言者の名前など)」、「大学間で謝金単価が異なっていること」という内容が指摘されていた。「一緒に練習をしたことがないので、連携がうまくいかないとか、全部打っていると時間がないから要約するというときにも、チグハグになって、文末がおかしいこともあった。一緒に練習したい。」(表5:1. 共同練習の機会の確保)や「訂正してほしいところに訂正が入らないことがあった。自分が入力担当のときに念を送っても届かない場面があった。」(表5:8. 訂正の方法)という内容から、本研究は先行知見と同様の結果であった。

先行事例では、謝金単価の違いに関する意見が指摘されていたが、本実践ではそのような意見は1件も見られなかった。これは、A 大学から B 大学への依頼時に謝金単価と活動時間を明示したことから、日程や担当授業の専門性に加えて、謝金額も含めてノートテイク担当に応募したことが理由として考えられる。また、「ノートテイク本来の課題か、大学間連携の課題か難しいが、一番思ったのは事前練習がなかったので、知識をあらかじめ共有できていない、能力を共有できていないので、練習はあったほうがいい。」(表5:1. 共同練習の機会の確保)とあるように、ノートテイク共同実践では共同での練習が不可欠と言える。受入側 A 大学、協力側 B 大学ともに、ノートテイク活動の経験を積んでいる学生にとっては、他大学で異なるノートテイク経験を積んでいる学生と共同でノートテイクをすることによって、自身の所属大学との違いが明確になることが背景にあると考えられる。共同での練習は効果的だと考えられるが、大学間連携をする大学同士で必要な場合に

のみ練習機会を設定することは、効率的ではないと考えられるため、日常的に一定の地域内の大学が NT 学生を共同で養成しておくことが解決策になり得ると考えられる。

4.3. 今後の課題

NT 学生の共同養成については、公益財団法人大学コンソーシアム京都による養成研修講座、PEPNet-Japan による共同養成の取り組み（岡田ら，2021）が見られる。しかし、共同養成に関する課題は明らかにされていない。今後も、各大学で NT 学生のリソースが偏ることが想定されるため、NT 学生を 1 つの大学のみで養成し続けることは現実的ではない。そのような場合に、共同養成が解決策になり得るため、一定数の大学が集まって共同養成をする際の課題や留意点を明らかにすることは、今後の聴覚障害学生支援において、NT 学生を安定的に確保し、情報保障の質を維持・向上する点で意義がある。今後は、NT 学生の共同養成に向けて、具体的な検討が必要である。特に、ノートテイク共同実践を担当した NT 学生からは、「共同実践に関する提案」や「大学間連携の継続」に関する意見も見られた。これまで、NT 学生が不足することによる情報保障の質低下を防ぐことを目的として、大学間連携ノートテイクを検討してきたが、共同実践を担当した NT 学生は今後も大学間連携を希望しており、「実践的学び」や「テイカーの成長」も見込める。そのため、NT 学生の教育の観点からも大学間連携ノートテイクに取り組む意義があると考えられる。

本実践では、大学間連携ノートテイクの共同実践を担当した NT 学生を対象に、座談会形式で聞き取りを行った。協力側 B 大学は、日常的なノートテイク活動や授業等でのノートテイク実践経験が乏しく、今回の共同実践が初めての担当という学生も見られた。大学間連携でノートテイクをすることは、自身の所属大学での活動との違いを明確に認識する機会になる。同じノートテイカー学生という立場であっても活動継続動機が異なるように（下中村ら，2023）、ノートテイク活動歴や活動の程度（ノートテイク活動と実践）、活動継続動機、ノートテイク技術、所属大学のノートテイクへの考え方などの NT 学生の背景によって（すなわち、B 大学ではない、他大学と大学間連携をすることによって）、異なる聞き取り結果が得られる可能性がある。そのため、他大学ともノートテイク共同実践を行い、事例を蓄積していく必要があると考えられる。

また、本実践では、受入側 A 大学は協力側 B 大学の NT 学生も含めたコーディネートを行ったが、「雇用手続きをしないといけないのは分かっているが、やり取りをたくさんしないといけない。それ以外に Moodle 手続き、Outlook など、手続きを一気にしないといけない。支援のためには重要だが、大変だと感じた。」（表 5：4. 大学間連携時の留意事項・マニュアル・引き継ぎ）という聞き取りが得られたように、事務手続き上の負担があったと考えられる。これは一方で、受入側 A 大学の部署によっては、A 大学の NT 学生であれば生じなかった業務が、他大学の NT 学生がノートテイクを担当することによって新たに生じたと考えられる。ノートテイクが実施された授業の担当教員との関係では、「自分がオンラインで参加していることを気にかけてくれていたので、やりやすかった。」（表 4：2. 遠隔地のテイカーと担当教員の関係）という聞き取りが得られたように、今回の実践では、他大学の NT 学生が自身の担当授業に入ることで、教員の負担はほとんど見られなかったと考えられる。しかし、教員が障害のある学生に対して合理的配慮を実施する際は、配慮実施に伴う負担があることも指摘されている（岸川ら，2022）。今回は、ノートテイク共同実践を担当し

た NT 学生のみを対象として、その効果と課題を明らかにしたが、ノートテイクを実施するためには事務手続きが不可欠となる。そのため、今後は、大学間連携ノートテイクを実施する際の負担感について、教職員を対象とした調査も実施し、明らかにすることが必要である。

引用文献

- 岸川加奈子・大鷲賢二郎・下中村武・横田晋務・田中真理（2022）合理的配慮実施に関する大学教員の負担感の変化－授業のオンライン化に着目して－. 基幹教育紀要, 8, 1-16. https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4772816/008_p001.pdf (2023年10月30日閲覧)
- 文部科学省（2020）障害者活躍推進プラン https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/mext_00992.html (2023年10月15日閲覧)
- 根本匡文（2017）聴覚障害幼児・児童・生徒を囲む教育環境. トピック別聴覚障害学生支援ガイド PEPNet-Japan TipSheet 集（改訂版）. https://www.pepnet-j.org/support_contents/textbook/tipsheet (2023年10月24日閲覧)
- 日本学生支援機構（2015）3. 聴覚障害（2）場面一覧－聴覚障害 人的環境の整備－. 教職員のための障害学生修学支援ガイド（平成26年度改訂版）. https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/shogai_infomation/hien_guide/choukaku_bamen/kankyo_jinteki.html (2023年10月15日閲覧)
- 日本学生支援機構（2023）令和4年度（2022年度）大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書. https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/_icsFiles/afieldfile/2023/09/13/2022_houkoku3.pdf (2023年10月15日閲覧)
- 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（2016）”いつでもどこでも”の情報保障の実現に向けて－遠隔情報保障事業成果報告書－. <http://hdl.handle.net/10460/1481> (2023年10月15日閲覧)
- 岡田雄佑・磯田恭子・吉田未来・澤田佳代・白澤麻弓・中島亜紀子・萩原彩子（2021）オンラインにおける遠隔パソコンノートテイク講座－東海地区での事例報告－. 全国高等教育障害学生支援協議会第7回大会.
- 下中村武・古田弘子（2017）高校で学ぶ聴覚障害のある生徒への授業時の配慮に関する調査研究－授業担当教員自身の認識に着目して－. SNE ジャーナル, 23(1), 161-172.
- 下中村武（2018）高校における聴覚障害のある生徒への配慮の取り決めに関する調査研究－授業における教員の話し方及び授業環境に関する配慮に着目して－. 聴覚言語障害, 47(1), 39-50.
- 下中村武・鈴木大輔・田島晶子・今村葉・川口智也・横田晋務・田中真理（2021）オンライン環境における障害学生支援の実践. 基幹教育紀要, 7, 155-174. https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4363107/p155.pdf (2023年10月14日閲覧).
- 下中村武・田中星夏・中野光里・岸川加奈子・横田晋務・田中真理（2022）音声情報の取得に困難のある学生への文字による遠隔情報保障に関する実践的検討－聴覚障害のある学生への支援から－. 基幹教育紀要, 8, 69-87. https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4772825/008_p069.pdf (2023年10月14日閲覧).
- 下中村武・古田弘子（2022）聴覚障害のある児童生徒への遠隔情報保障のための支援学生養成研修の実践－ノートテイク技術の向上を目指して－. ろう教育科学, 64(2), 41-53.
- 下中村武・岸川加奈子・横田晋務・田中真理（2023）ノートテイカー学生の活動継続要因の検討－教員養成

系以外の大学の学生に着目して－. 基幹教育紀要, 9, 99-114. https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/6769089/009_p099.pdf (2023年10月31日閲覧)

